複合形容詞の構成要素について

松井正道

(昭和44年4月25日受理)

Some Observations on the Elements of Compound Adjectives

by Masamichi MATSUI

Abstract

A compound is formed by compounding which consists in joining two or more words to form a new entity. Numerous compounds have been adopted at every period of the English language. But the growth in the use of compounds was not invariable. During the nineteenth century the use of them was rather out of favour, because the English language was believed to be an analytical one which employed an analytical system of showing syntactic relations. In recent years, however, the use of compounds has remarkably increased. Although any combination of the parts of speech can be employed in making compounds, such combinations as 'noun with noun', 'noun with adjective', and 'adjective with noun' are the most usual patterns. Although most of the elaborate compounds are noun-headed, it is also to be noticed that some important compounds are adjective-headed and some are participle-headed. When compounds are formed with adjectives as heads, the adjunct to the adjectives is a noun that can be paraphrased by a prepositional phrase expressing some relations such as resemblance (or comparison), place, time, respect, etc. Although it is not so difficult to construe the meanings of compounds like' paper-thin' or' 'ice-cold,' it sometimes happens that the lack of devices for specifying relationships among the elements causes great difficulties in construing the syntactic relations. In fact the ambiguity of syntactic relations may exist in some cases. But in most cases clichés, both lexical and structural, can give us the clue to find the correct relations.

The attempt made in this paper is to make explicit the relationships between the elements of compound adjectives classifying according to the representative patterns. The illustrations given here are chiefly composed of two elements and nonce compounds are excluded.

〔一〕

現代英語における複合語の発達はめざましいが，それは英語自身のもつ形成能力によることはいうまでもないが，時代による盛衰があり，外来語の流入が複合語の衰退を招いた時代も

あり，また外国語が複合語の形成に影響を与えた時期もあった。複合語はそれを自由にみとめる言語においては，新しい語を作る必要性にこたえる最も容易な方法であり，複合名詞が一番多く，ついで複合形容詞，複合動詞が多くもちいられる。複合形容詞の最も一般的な型は「名詞＋形容詞」,「副詞（または形容詞）＋形容詞（分詞形をふくむ）」「形容詞（または名詞）＋'名詞＋ed'」のような構成要素からなる場合であるが，この構成要素間の論理的関係は複雑多様で grass-green, good-natured のように明瞭な場合とそうでない場合とあり，その構造が簡潔であるだけにその意味の把握が容易になしがたいことも少なくない。

H. Bradley は複合語についてそれはしばしば不完全な敍述であり，ある単純な概念をあらわすための複合語はもしわれわれがその語のもつ字義どおりの意味を忘れることができなければある不便さをあたえるとし，しかし一見恣意的とうけとられる複合語も言語的要求にもとづいて形成されるもので Carlyle が mischief-joy というときわれわれに言語上の違和感をあたえ，また purse-proud という語はながく容認されてきたが，それと類似の rank-proud は英語として不適当であろうという[1]。それにもかかわらずあたらしい複合語がつねにうまれていることも事実であり，*lightning-quick* blows (W. H. Hudson) などその一例であろう。

Jespersen は非物質的な概念に関するところでは複合語に対するある忌避感がしばしばみられるとし，したがって Carlyle の mischief-joy は大低の人には言語の本質にそぐわないものとうけとられている。しかし language-difficulty, minority-question, birth-rate などが耳ざわりな感じを与えないのは何故かという問に対しては決定的な規則はありそうになく，ただ既存の複合語がその一つの範例として役立っと考える[2]。

複合形容詞の場合，現代英語では並置綜合語使用の増加はいちじるしいが S. Potter は large-hearted, narrow-minded などのほかに一般的な複合形容詞として heart-breaking, labour-saving などの分詞形をあげる[3]。E. Weekly も近代英語期における複合形容詞として blood-stained, cloud-capped, moonlit などの分詞形容詞や a *matter-of-fact* man, *go-ahead* firm などの例をあげる[4]。

このような複合語の特徴は第一に表現の簡潔さにあるといえようが，そのためにその構成要素間の論理的関係が曖昧な場合が少なくない。この点について H. Sweet は a water-plant, sun-dial の例をあげ，前置詞や屈折形などの方法による場合には正確な分析にまたねばならないが，複合語によれば曖昧さは残るが，その構成要素間の論理的関係の分析を必要とせずに自由に形成しうるという[5]。

R. B. Lees は複合名詞の構成要素の関係についてそれがただ二つの構成要素からなり，それぞれ主語と述語動詞，主語と目的語，動詞と目的語のような相互に最も一般的な文法的関係をくみこませる以上，このような構造には文法的曖昧さをふくむ大きな可能性があるといい，それ故われわれがいろいろな複合語の型に対して与える用例の大部分はその問題の型の存在を例証するためのものであるが，このようにもちいられる複合語の例がすべてこの型以外にはお

こりえないというものではないことを忘れてはいけないという。大低の場合吾々はある複合語をそれがたまたま一般的にもちいられる型の用例としてのみ示す。ところがそれぞれ話者はその一般的用法において吾々がそれらに与える分析とことなる文法的分析が可能なものとして複合語を解釈することがあろう。たとえば snake-poison は一般に poison from a snake を意味するが，そのほかに poison of a snake. および poison for snakes の意味の解釈も可能であるという[6]。

これに対し Jespersen は複合語は二つの事物あるいは概念の間の関係をあらわすが，その関係を理解すべき方法についてはなんら語ることがないとしそれは文脈か別の方法で推測されなければならない。理論上これは同一の複合語に対して多数のことなる解釈の余地をのこすが実際は曖昧さは原則として避けられるという。そして多くの複合語は一定の物に対する伝統的呼称をにない，goldfish, goldsmith (etc.) などのように複合語の意味は一定しておるが一般の複合語の構成要素の論理的関係のすべてを完全に分類することは容易でなく，而もその関係を適確には明示しがたいと考える[7]。このような考えは H. Sweet のそれとおおよそ一致するもので非統語構造をもつ多くの複合語の場合には構成要素間の関係について解釈の相異がみとめられるのは当然で，複合形容詞についても予想されることであり，B. Hathaway はもし吾々が turtle-dreamy という語をつくるとすればその意味は Something is *as dreamy as a turtle.* あるいは Someone is *dreamy for turtle.* のいずれかの解釈が可能であると考える。このような曖昧な関係を予想する語の構成要素の解釈には常套語が重要な手がかりになるが，この常套語は辞書的であると同時に構造的なものであるという。たとえば dove-gray, mountain-high. …のような複合語になれればその常套語構造がわかり，reed-slim, ice-cold のような名詞と形容詞との結合を自由に形成しうる。もしわれわれが turtle-dreamy の意味より turtle-slow のそれがわかりやすいとすればそれは後者が辞書的意味における常套語であることによるものと考える[8]。

snow-white, coal-black のように構成要素に具体性をもった（色の名前など）が示される場合，常套語句の理解が一層容易であると思われる。

このような二つの構成要素からなる複合形容詞について，その統語関係および形態上の特徴などを既にのべたいくつかの型に分類して考察したい。

〔二〕

複合形容詞の構成要素間の関係は paper-thin, ice-cold のように類似の関係を示すもの，colour-blind (=blind in regard to colours), girl-crazy (=crazy about girls.), *punch-drunk* fighters (A. E. Hotchner.) (=drunk from punches) など多様な関係を示す。

(1) 名詞＋形容詞

grass-green, sea-green, emerald-green, のように第二要素を共通とし，しかも第一要素と

の間に同じ'類似'の関係が支配するもの, sea-sick, heart-sick, home-sick, あるいは blameworthy, sea-worthy のように関係をそれぞれことにするもの, age (year, month,)-old, wife-old, のように同じ'程度'を示すが微妙な差異を示すもの, また water-tight, water-proof, あるいは dog-tired, dog-weary のように第二構成要素をことにしながら同じ意味を示す場合もある。

War-weary, car-hungry Americans (American Speech) では前者は world-weary, travel-weary と同類で weary of war. を意味し, 後者は amusement-hungry (Hathaway) blood-thirsty, と同じ purpose の関係を示している。It is little wonder that they went *land-mad*. (Steinbeck) She was *man-mad*. (Sexton Blake) なども類似 (purpose) の関係を示すと考えられるがこれらは furnitur-mad (mad for furniture) の同類であろう。A *microbe-free* ring (P Crane) は carefree (free from care), cost-free, などと同じ関係を示し, *age-specific* ethical capacity (Erikson), *forest-wise* men (Steinbeck) は colour-blind のもつ論理的関係を基礎にしていると考えられる。

There was one whose colour he liked, a *dove-grey* (J. Galsworthy) の dove-grey は一般に paper-thin と同じ論理上の関係を示すが, ここでは dove-colour の意味の名詞の役目をしている。water-proof なども複合形容詞としてもちいられるのがふつうであるが動詞の機能をもつことがある。

(2) 「形容詞＋形容詞」あるいは「副詞＋形容詞」

二つの形容詞を構成要素とする複合形容詞は一般に第一要素が副詞的に機能して第二要素を限定する場合が多いが, この場合 snowy-white, reddish-brown のように第一構成要素に語尾変化をともなうこともある。また二つの要素が並列的に結合する並列複合語としては sour-sweet (G. Orwell), political-social issues (American Journal), politico-social (ibid), Anglo-Japanese, English-Grerman (dictionary) などの例があげられるが, 第二の例については構成要素の位置の交換が可能であり, 第五の例と形態上の類似を示すが, 第五の例は構成要素の交換は意味の変化をともなう。Anglo-Catholic は Anglo-Japanese と類似するが, 前者は第一要素が第二要素に対し副詞的機能を果す点がことなる。このような例としては half-awake (children) (1) all-powerful, (2) dead-ripe (3), worldly-wise, luke-warm (4), over-conscious, under-scrupulous (5) などがある。

(1) は easy-going, quick-cooking などと同じく第二要素が単独では限定形容詞となりえず (4) は構成要素がそれぞれ密接不離な関係をたもっている, in *good-old* revolutionary fashion, (Erikson) の good-old は複合形容詞で上例に近い機能をもつが good old Pauline (A. E. Hotchner) (good＝dear), in the good old days (Conrad) などと区別されるべきであろう。また *wide-open* system (F. Thistlethwaite), a *wide-open* city のように同一の複合語がそれが限定修飾する語の如何によって意味をことにすることもあり, 後者の例のように比喩的な意味をふくむことが多い。

(3) 複合分詞

over-sophisticated, (D. C. Coyle), easy-going のような複合語は第二構成要素を分詞とする分詞形容詞であるが，上例と類似の機能をもつ。

As a matter of fact, it is more than likely that we might properly be called *newspaper-made*, *radio-made*, *movie-made*, and *advertisement-made* people. (H. A. Overstreet) *newspaper-reading* public (ibid), *data-handling* centers (American Journal) のような例は現代英語に多いが，後者は第一構成要素が現在分詞の動詞の目的語の関係に立ちその類例も多いが，その他の場合には第一要素が第二要素の分詞に対して時，場所，程度などの関係を示すことが多い。

(a) 分詞が現在分詞の場合

sun-flashing glassy heits (E. Bowen) のように名詞が分詞の主格の関係に立つこともある。*opium-eating* habits, *red-baiting* は形態上 *newspaper-reading* public と同じであるが，前者は動名詞であり，後者は *red-baiting* politicians という構造をもつとき（分詞形に続く名詞の如何により）複合形容詞になる場合もある。このような分詞と動名詞の区別は第一要素が形容詞（あるいは副詞）の場合にもいいうることで *hard-working* days (Jespersen-G. Eliot), to read pamphlets against religion and *high-flying* (N.E.D) はそれぞれ動名詞であるが，*hard-working* men, *high-flying* ideals about life はそれぞれ分詞としてもちいられている。

いま分詞形容詞の主な用例をあげると

slow-moving boats. (American Journal) (1)

forth-coming events (ibid) (2)

quick-acting emotional drugs (A. Huxley) (3)

unpromising-looking Oklahoma (Steinbeck) (4)

His mouth was sticky and *evil-tasting* (G-Orwell) (5)

It was a noisy, *evil-smelling* place (ibid) (6)

a company of *forward-looking* businessmen (Steinbeck) (7)

上例 (1)～(3), (4)～(7) はそれぞれ形態上の類似性を示すが，(4)～(6) は good-looking (-stating, -sounding, -smelling) と同型で good を look の補語とみるか，Jespersen のように 'looking good' でなく，むしろ 'having good looks' とみるか[9]，二つの見方があるが (4) については前者，(5), (6) については後者の解釈が妥当なものと考えられる。(7) の基底文は Businessmen look forward で，その構成要素の関係は (1)～(3) に類似するものといえよう。

(b) 分詞が過去分詞の場合

一般にこの型の構成要素間の論理的関係は (a) の場合と同じく場所，時，様態など多様な関係を示す。

the *university-affiliated* research institute (A. Journal) (1)

a *mission-oriented* agency (ibid) (2)

the cheap little *air-conditioned* engine (ibid) (3)

Carnegie-created Teacher's Annuity company (ibid) (4)

their *nail-studded* "oaken" doors (J. Kirkup) (5)

the *stone-flagged* floor (ibid) (6)

his *towel-wreathed* head (ibid) (7)

the *chandelier-hung* Spanish Riding School (ibid) (8)

the *lantern-hung* exterior of neat little Japanese bars (ibid) (9)

以上の複合語はいずれも名詞を第一要素とする例であるが,(5),(6) はそれぞれ名詞+'名詞+ed' 型と形態上類似している。(6) は The stone is *flagged with stones* を基底文とし, *stone-walled* の並置綜合複合語とは構造をことにしている。

B. Hathaway は上例と類似の例を示したのち, 第一要素が分詞の主語となる a *service-included* price (the service charge is included in this price.), *air-conditioned* luxury (luxury in which the air is conditioned), などを例示し, 複合語の意味が単に二つの構成要素だけでなく, その構成要素が限定する語をふくむ統語構造においてはじめて決定されると考える[10]。

このような形容詞の機能をもつ複合分詞の中には *new-born*, *close-knit*, *high-strung*, *thorough-bred* などのように第一の要素が副詞の働きをし, しかも *newborn* babies (D. C. Coyle), *thoroughbred* のように solid compound としてももちいられるように,第二要素との間に緊密な結合関係がみとめられるもの, また adverb (or particle)+verb (participle) の型として *out-stretched*, *down-cast* (eyes), *inborn* (gentleness), などがその例であるが,第一の例のように stretched-out (arms) のように語順の移動が可能な場合もある。この点について Jespersen は分詞形の場合には定形動詞の場合以上に particle+verb の古くからの語順を維持しようとする傾向があるのは前者の名詞的性格に起因するとし, *outlying* village, *inborn* gentleness, *down-trodden* peasants のような場合は, これらに相当する定形動詞が存在しないことからこの位置をとるが, verb (participle)+particle (adverb) の例として *cast-off* clothes, a *broken-down* car, *lighting-up* time の例をあげる[11]。第三例の現在分詞が第一要素としてもちいられる場合は少ないが, *drawn-out* talk (H. Keller), the *thought-through* book (M. J. Adler), the *stored-up* and projected power of man (H. Marcuse) などいずれも副詞が分詞を補足して idiomatic phrase を形成しており, また *unthought-of* のような「分詞+前置詞」型もこれと類似の機能をもっている。

副詞が第一要素として分詞の前位におかれる例として *well-understood* reason (D. Coyle), *fully-wrapped* presents (J. Kirkup), *oft-expressed* belief. (J. P. Marquand) のように第一要素が程度を示すことが多いが, a *theoretically-oriented* mind (G. J. Whitrow), *dangerously-crowded* slope (J. Kirkup) のように様態を示すこともある。

これと類似形態をもつ a *plain-spoken* man, *outspoken* people, a *well-read* man などは自動詞による分詞形で前述の他動詞の場合と区別されなければならない。

また *well-armed* (分詞形容詞) と *long-armed* (形容詞＋名詞＋ed) も区別されるべきであろう。

(4) 名詞 (形容詞, 副詞)＋名詞＋ed

上例 *long-armed*, *good-natured* のように接尾辞が名詞に附加されて所有の見味をもつ形容詞を形成するがこの型の複合語の中には *life-size* (d) のように接尾辞があるなしにかかわらず複合語の status がかわらない場合と, *new-fangled*, *absent-minded* (single-minded etc.) のように接尾辞なしに独立語たりえないものがある。また複合語の第一要素が *moderate-sized*, *moderately-sized* のようにかわっても意味が同じ場合もある。

the *deeply-rooted* and permanent faction of inheritance, his *deep-rooted* and pervasive carelessness (H. Commager) もその一例であるが, この型の複合語の中には the reasons are *well-ordered*. It is *well-proportioned* (Kirkup) のように分詞形か '名詞＋ed' 型か容易に判断しがたい場合もある。*specially-shaped* knives, *bomb-shaped* British Christian delicacy (Kirkup) の 2 例についても後者 (ed 型) はとも角, 前者は分詞型と即断しがたいように思われる。このような -shaped, -rooted, -dressed などにまぎらわしい例が多い。

water-logged ground, *water-coloured* sketches はその型の類似性にもかかわらず前者は water-log という動詞の分詞形であり, 後者は water-colour (複合名詞) に接尾辞が附加されたものであるとは容易に判断できよう。

onion-topped Russian Orthodox Churches (Steinbeck) も *snow-topped* mountains (分詞形容詞) と外形は類似しているが前者は *pumpkin-and-onion-domed* steeple (J. Kirkup) と同類と考えられ, (4) (ed 型) に属するものであろう。この型の構成要素の論理的関係については *stone-walled*, *paper-laced* などは材料を, *bomb-shaped*, *gorilla-faced* guards (G. Orwell) などは '比較' (類似) の関係を示している。*silver-tongued*, *civilian-minded* community (Orwell) *whey-faced* men (ibid) のように比喩的表現も少なくない。*opposition-minded*, (C. P. Snow) *loving*-hearted. などは臨時複合語あるいはそれに近いものであろう。

この型の複合語において blue-eyed, sore-footed, (sure-footed, fleet-footed,) red-handed (high-handed) などのように第二構成要素が接尾辞を附加して複合形容詞が形成されるのが普通であるが, *God's-eye* view, (H. Smith) (bird's-eye view), a *short-hand* information (C. P. Snow), a *full-dress* argument (ibid) のように 'ed' を必要としない場合もある。a *bare-foot* laborer (D. Carnegie), the shouting *hard-shell* Baptist preachers (ibid), a kind of *roughneck* neutralism (C. P. Snow) などは, 接尾辞の有無にかかわらず同じ機能をもつと考えられる。*life-size* doll, a *quart-size* pitcher (P. Crane) (string compounds) も同様と考えられるが, *quoto*-sized blank book. *decent-sized* feather (G. Orwell) などは ed 形が普通であろう。接尾辞

の有無が意味の変化と同時に構造の差異を示すこともある。a *right-hand* rope, a *right-handed* man, *free-hand*, *free-handed* などがそれでこのように複合語がそれにともなう名詞の如何によってその品詞の機能またその語の意味上の変化をともなうことがある。

前述の *full-dress* argument と *full-dress* uniform を比較すると前者が形容詞であるに対し，後者は複合名詞とみなされよう。*free-lance* journalist, (S. R. Golding) と free-lance (noun あるいは verb) の間にも同じ関係が存在する。

a *four-footed* animal, the *five-foot* strip of silver (S. R. Golding) のように同じ意味が生物と無生物とで語法上区別されることもある。

(5) 形容詞 (名詞)＋名詞

one-horse buggy (D. Carnegie), a *three-volume* biography of Lincoln (ibid), *top-storey* windows (G. Orwell), the *new-style* atomic engineers (C. P. Snow), the interior of a *working-class* house resembles that of a *middle-class* house, (G. Orwell), Provincial universities have brought into being a new kind of man *middle-class* in income (ibid) このような形容詞の機能をつ複合語の増加は現代英語の著しい特徴であるが，Jespersen は commonplace, all-world, first-rate, のような Adj＋Noun 型の複合語および matter-of-fact のような複合語は付加詞としてもちいられることが非常に多いので，接尾辞などの手段によって形容詞を派生させることの不可能な当然の結果であるという[12]。common-sensible, elder-brotherly, one-dimentional のような派生辞をもつ複合語の場合は区別して考えられるべきであろう。

knock-about argument (C. P. Snow), *stand-up* fight などのように動詞句が形容詞としての機能をもつことも珍らしくないが，この場合も common-place などの場合と同じく派生辞による複合語の形成が不可能であることがその形態の一の特徴であろう。

なお形容詞と名詞からなる複合語の中には，*high-rise* buidings, *low-cost* housing, のように第二構成要素が動詞性をもつものなど，上例と構造上の区別がみとめられるよう。

〔三〕

以上複合形容詞の機能をその構成要素の主な型に従って考えてきたが，そのような構成要素が必ずしも複合語の機能を決定するものではなく，a *seventeen-year-old* student (S. Raven), a love-sick *seventeen-year-old* wrote to her cousin (ibid) のように同一語が前者では形容詞として，後者では名詞としてもちいられている。

C. Barber は *long-playing* record は米語では a *long-play* record であるが，この形態は英国でも一般化の傾向にあるとし，*four-seat* car, *double-deck* bus の例をあげる[13]。このように英語と米語の語法上の差も考慮されるべきであろう。

Barber はさらに多少俗語的表現であるが「動詞＋副詞」型の put-off が *off-putting* (＝disconcerting) のように複合形容詞に転化されること，*sick-making* (＝revolting) のような

新しい型の複合語を指摘する。[14)]

このように複合語は日々増加の傾向にあり，現代英語では上述のような類型をもつ語ばかりでなく，臨時複合語あるいはそれに近い語の形成がみられるが，これらについては今後の課題としたい。

註

1) Bradley, H.: The Making of English. pp. 116–119, 1955, Macmillan.
2) Jespersen, O.: A Modern English Grammer. VI. 8, 15, p. 140, 1954, George Allen & Unwin.
3) Potter, S.: Language in the Modern World. p. 69, 1961, Hazell Watson & Viner.
4) Weekley, E.: 訳者 (東浦義雄), 英語発達史. §10, 191 頁, 千城書房.
5) Sweet, H.: New English Grammer Part I. p. 449, 1891, Oxford.
6) Lees, R. B.: The Grammar of English Nominalization. p. 122, 1966, Mouton.
7) Jespersen, O.: M.E.G. **8**, 14, p. 137.
8) Hathaway, B.: A Transformational Syntax. p. 259, 1967, Ronald.
9) Jespersen, O.: M.E.G. Part V. **22**, 25, 405, 1954.
10) Hathaway, B.: A Transformational Syntax. 273.
11) Jespersen, O.: M.E.G. Part VI. **9**, 73, p. 172.
12) Jespersen, O.: M.E.G. Part II. **13**, 87, p. 330.
13) Barber, C.: Linguistic Change in Present-day English. §IV, p. 88, 1964, Oliver & Boyd.
14) Barber, C.: Linguistic Change in Present-day English. §IV, p. 88, 1964, Oliver & Boyd.